

## 支那國民の思想を論ず : 論説

著者	咲花, 一二三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 0
ページ	2 1 - 3 5
発行年	1902-02-15
その他の言語のタイトル	支那國民の思想を論ず : 論説
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5298">http://hdl.handle.net/2298/5298</a>

すして修まる可し。安心立命此にあり、生命元氣此にあり、希望歎喜此にあり此れ豈人生最高の極致にあらずや、

終に臨み、更に少しく、倫理と宗教との關係に述べん。吾人は何も倫理の實行を期せんが爲めの手段として、神を信ぜざる者にあらず、道德の方便として、宗教を奉ずる者に非ず。却て道德的意識の發達によりて、自ら神を認めて之を信するに至るなり。純潔なる愛情の人となりて、自ら信仰を得るに至るなり。宗教の價值は、相對にあらずして、實に絶對なり。聖書に「愛は信仰よりも、希望よりも重し」「心の清き者は幸なり、其人は神を見ることを得なければなり」とある者、又チャニングが「道德進歩して宗教となる」と云へる者、誠に故ありと謂ふ可し。

要するに、倫理は宗教に至るの道路のみ、倫理の終局は實に宗教の起点なり、而して倫理問題の解決は必ずや宗教の力に待たざる可らず。宗教の事豈忽諸に附す可けんや。

(完)

## 支那國民の思想を論ず

咲花 一 二三

東海の表、幾重の版圖、幾億の民衆を擁し、自ら稱して中國中華なりとし、一切他邦を蔑視して、戎狄蠻夷なりとなすものは支那帝國にあらずや。

國を建て、星霜茲に四千歳。宏麗繁華一世の文明を誇負せる歐洲諸國が、なほ森澤鬱濕として狐虺其の裡に跳梁し、野遼烟低く沈みて、牧童弦月に笛を弄せし頃、既に業に、此の國には燦然たる文物、燁如たる憲章を有し、明主上に莅みて黔首悉く文明の治に浴するを得たり。然かも現今の狀態

は果して如何。其の文物憲章は依然として其の故態を改めざるにあらずや、其の元首秦氏は頑然として其の舊弊に沈むにあらずや。

語に曰く革命は進歩を生むものなりと。吾人は此の語が支那帝國に恰當せざるを悲しむ。遠く三代の昔より、近く愛親氏の勃起に至るまで、世を代ふる既に二十余、革命相踵ぎ爭奪相追へ。然かも寸尺の進歩をも見ざるなり。巫山巫峽依然として、老猿徒らに古を叫ぶあるのみ。

夫れ然り、然りと雖其の危然たる版圖と不盡の富源とは、なほ東洋代表の一大雄邦として、從來列國の忌憚する所なりしに、彼の日清戦争の結果として黔驢の真相兀として世界の視聽を驚かし、遂に貪婪飽くなき西人をして機乗すべしとなし、各々其の爪牙を磨してこれに當らしむるに至れり。此を以て支那問題は、列國政治家が最も熱心なる研究問題となり、或はこれが割取を議し、或はその保全を説き、或はこれを推測して、大帝國豈に一人の志士なからんや、必ずや革命的大人物の崛起するあらんと論し、或は相互に破裂して數多の小邦割據を見るべしとなし、其の他揣摩臆測百出して決する所を知らず。知らず孰れか其の説の當を得たる。

揣摩臆測これを西人の自由に任す。たゞ夫れ支那帝國の經歷如何に由て、直接大利害を感ずるものは我が帝國なり。地はこれ一葦帶水を以て雲烟相望み、人はこれ同文同種を以て古來相交る、商業上の關係、國防上の必要亦た素より他國の比にあらず。唇齒輔車、此の老大國の一進一退は、將に大に我が帝國の運命に關聯せんとす。此に於てか我が帝國の志士亦た大に刮目する所あり、銳意熱心、是れが經營を論策するもの春筍の如く然り、而して彼等の説く所を聞くに、清國今や大に舊弊を脱り革新の機運は既に大に熟するものあり曰く鐵道の設計、曰く鑛の探掘、曰く、科擧法の改正

曰く何、曰く何と、而して清國民一般は漸く彼れ奸黠なる西人の謀計を知り、日本を以て唯一の友朋國と信ずるに至れり、彼の地新聞が、盛に日本の開化を艶稱し、日支提携大に歐州諸國と衡を爭はざるべからずと論ずるが如き、將たまた、兩湖總督張之洞が、日本語の學堂を彼の地に起し、又た數多の俊秀を我國に遊學せしむるが加き、實に其の明証にあらすや、殊に今回の北清事件に於ては、彼れ我國の恩惠に感泣すること最も多し。此の際に當り、我が全力を盡してこれを扶導輔植せんか十年の後必ずや清國の形勢は一變するものあらんと。

嗚呼果して然るか、果して然るか、素より清國衰へたりと雖、然も四百余州豈に一二の志士ならんや、挺身以て國家に殉ずるあらんか、革新の曙光一線二線山角に搖閃するある、素より其の所ならんのみ。然かも、支那帝國の革新は彼等が。唱導する如く然かく容易なるものあるか、吾人は恐る其の革命たる只だこれ一時一地方の革命にして、一般四億の國民は依然として桃源の夢より醒めざるにあらずやと。吾人は徒らに此くの如き言をあすものにあらず、乞ふ之れを史籍に徵せよ、清國民には國家なる觀念なし、先秦は姑くこれを措き、秦漢六朝以下の諸朝、王朝の名は儼として之れあるが如しと雖も、抑も何れの時か、其の國民が外國に對して國家なる觀念を發揮したるどありや、其の國家の名目たる、亦た唯だ王室を指し、宗廟社稷と同一の意義を有するものにして、未だ嘗て方今宇内の通義たる國家の觀念を理會するにあらず。既に國外に對して、一の國家を形成すとの概念を有せず、奚んぞ之れに向て國際の關係、國際の條約を知るを求むるを得んや。元來、彼の國の習ひとして、國家は亡滅すと雖も社會は必ず遺留す、而して其の社會制度たる、牢乎として容易に之れを破滅すべからざる性質あり。彼等は既に幾多王朝の變移に慣れて之れを怪まず、征服者

に服従するを以て、其の將に盡くすべき義務なりと惟へり、故に朝に一國と交を修むるも、夕に之れに勝るの一國を見れば、直ちにこれに向ひ、轉々反側而して自らは以て不義となさす。此に於てか吾人は思ふ、記者の云へる如く、然かく容易に清國問題は解決せらるべきものなるか、例へ同文同種なりと云ふと雖も、思ふに彼等の念中なほ是れよりも重なる概念あり。利、即ち是れなり。利の嚮ふ所彼等の眼中東西人の別なし、其の近來漸く日本に親む、彼等の眼中奚ぞ那所の利益を認めたるにあらざるなきを得んや、而かも一朝利の盡くるを見れば、轉じて露と結び、獨と和し、佛と親しむに至らざるなきか。かくして吾人は徒に妬火炎々、失望落膽せざるや如何。其の成效の遅々たるを見て、支那の事またなすべからざと、一擲顧みるなからんとせざるや如何。

余竊かに思ふ、坊間徒らに彼の國体の性質を知らず、彼の文明の趨向を知らずして、隔靴之れが經營をなすものあらざるなきか、其の國情を知らずして、其の國を計る、我れの嫌忌する所、却て彼れの愛惜するものあらん、我れの是となす所のもの却て彼れの非となす所のものあらん、此れを是知らずして此れを爲す、豈に、眇者簞を揣して目となすものにあらざるなきを得んや、忽ちにして紛紜踵起して土崩瓦解、徒らに其の心を勞して、而して漁父の利空しく他に落ちんのみ、また益なきなり。

吾人不肖、敢て自ら僭して此の大問題を解決するに足ると稱するものにあらず。唯だ思へらく、乾圓球上、幾多纂布せる國家中、支那帝國の如きは其の國民の思想に於て、大に他と異なるものありと、即ち忙間拾讀せる斷片によりてこれに零感を加へ、以て此の文章をなす、素より以て識者の一顧にも値ひせざるなり。

悠々たる支那歴史が辿りたる四千星霜の經過中には、制度の變遷文物の革移素より少からず然れど所謂其の文明を貫通せる大綱のみに就て之れを見んか、吾人は實に支那國性の今日に於けるは、なほ其の上代に於けるに異ならずとなすものなり。此を以て其の上代を徵すれば、則ち以て後世を知るべし、而して其の上代を觀んと欲せば遺留されたる文書に憑依せざるべからざるや明かなり。

吾人が最古の簡牘に著はされたるものとして、今日に有する所は實に易と洪範となり。易の起源は伏羲にあり、伏羲仰いで天文に觀、伏して地理に察し、以て幽明の故を知り、遠く諸れを物に取り、近く諸れを身に得て而して八卦を畫す。夫れ易は最も崇高なる玄理を含有すと稱せらる、其の宇宙の分出を説き、萬象の化育を論ずる部分のみを取りて之れを見れば、易は實に儼然たる一個の哲學なり。然れども是れ理の爲めに理を説きたるにあらざ、實は天地人三者の關係を昭かにし、天道に従ふて人福を完ふせんとせしのみ。其の宇宙論化育論を説述せる根本的動機は、現實世界の功利に存せることは、繫辭傳を一讀せば炳々として明かなり。

夫れ支那古代の文化は北方に起れり、北方の地荒廢落莫概ね天恵に乏し。支那人が天を恐れ地を拜したるは之れ人情の自然のみ。然れども此の民族の實際的性質は、宗教心をも現實主義の隸屬とし、神を拜する間にも實際の利害を遺却せず、天威を恐るゝの傍ら、其の意のある所を迎合して、豫め吉凶禍福を卜せんことを務めたり。易は即ち此の思想の傾向を表章せるものに外ならず。蓋し易の根本的原理は生々主義なり。故に曰く

生々之謂易

易聖人所以崇德而慶業也

と、而して所謂聖人なるものは、最も善く此の生々主義を實行せしものなることを説きて曰く

備物致用立成器以爲天下利莫乎大聖人

と、又た曰く

天地之大徳曰生

と、已でに生を貴ぶ、其の生物の性を完ふし、又たこれが生存を勉めざるべからず、此を以て曰く  
成性存々道義之門也

と、而して成性存々を爲さんには健康を貴ばざるべからず、此を以て

天行健君子以自強不息

としてこれを徳とす。既に其の精神たるや成性存々にあり、吾人の道德は之れに達する方法にして、其の功利的のものたるや勿論なり。若し夫れ 洪範の九疇を按ずれば、其の政治經濟的の着眼よりして、天地の運行萬物の事理に於て其の民人の生活に關係ある項は、悉く網羅して遺すとなし。是れ亦た畢竟功利主義、生々主義の表章に外ならず。

周道衰へ、夏夷辨を失し、九鼎の輕重亦た漸く問ふ者あるに至り、國民の正學として一般に遵奉せる、儒學の祖孔子は出でたり。彼は今を去る二千數百年の昔に於て堯舜を祖述し、文物を憲章し、即ち所謂先王の道を演繹して後世の典謨となしたるものなり。

夫れ儒學は實踐道德主義なり、現世的主義なり。現世主義とは、一切現世の切利に裨益なき書物を排斥するの主義なり。孔丘は實に、此の思想の實際的傾向を最も明白に示したるものなり。且つ聞け彼の説く所を

務民之義敬鬼神而遠之可謂知矣

未能事人焉能事鬼

又た説かずや

敢問死日未知生焉知死

子不語怪力亂神

と、現世主義の面目此に於ては躍如たり。後世の支那學者が、其の學説を以て正統と崇したるは、洵に偶然ならずと謂ふべし。然りと雖も、此に吾人の注意を脱すべからざることは、彼の言や、しかく現世主義なりしと雖、彼は敢て、鈎玄闡幽の哲理を賤み、變幻倏急の天行を輕んずるものにあらずりしことなり。此を以て、彼は或人が彼に問ふに、禘の説を以てしたるに應へて曰く

不知也知其說者之於天下也其如示諸斯乎指其掌

と、又た一身の愼を説きて曰く

迅雷風烈必變

祭如在祭神如神在

と洞々たる其の意、綴々たる其の情亦知るべきにあらずや、然かも彼の強いて其の多くを謂はざりし所以のものは、實に千古の卓見なりと云はざるべからず。蓋し彼れの出るや、周初の流風委韻、邈然として漸く杳滅せんとするものあり、其の朝に羊に飲ふもの、將た又た其の價を豫するものゝ如き、當時の世堂に營に魯國のみに限らんや、人は將に盱々として其の適歸する所を知らざるものゝ如し。彼れは時勢を解せり。其の鬼神幽冥の理を究索思辨するの、異論百出して蒼生迷妄、言愈



多くして道愈々没するあるを思ひ、彼は切々として實行を勧め、以て堯舜の聖世に頤及すべきを説けり。其の

述而不作信而好古

と云ひしが如き、將た又た彼の亜流と稱せらるる孟子が

遵先王之法而過者未之有也

と稱せしが如き、偶々以て其の現代の惡潮を既倒に回さんと欲せし、一片耿々たる熱情の發して以て此に復古の精神と成りたるあるのみ。

支那人は時勢の推移と共に、政教の變遷すべきを知らず、一意成憲に法りて、其の教義を實行せんと擬す。故に上は國家より、下は個人に至る迄、其の理想とする所は唐虞三代の同家及び個人なり。此に至りて、孔子の實踐主義は最も卑近なる功利主義と變玄、儒學は一種の形式主義となり、文化の進歩を徹束する一大勢力となれり。今にして孔子をして是れを見せしむ、果して能く其の顔を掩はざるや否や。

孔子の教に就きて吾人の言はんと欲せし所は、今や之れを盡せり。吾人をして進みて、彼の所謂諸子百家中の重なるものに於て一例を與へしめよ。

彼の管仲は威公の名相なり。善謀良籌、能く其の君をして五霸の鴻業を就さしむ。而して且く彼れの説く所のものを聞かんか、

彼は經濟と道德とは相關係するものなることを説きて曰く

倉粟充而知禮節衣食足而知榮辱

と、又た古來の聖人は功利主義を實行したるを以て、蒼生之のれに翕附したるのことを云ふて曰く  
先王者爲民除害興利者也故民歸之

と、即ち知る、苟も功利主義を實行せざるの君主あらんか、彼等は疾然として直に去りて他に向は  
んのみ。これ洵に能く、支那國民が今日王家に對するの觀念を表章したるものと稱すべし。

此を以て彼等の文學も亦た、徹頭徹尾、功利主義、保守主義の摸型中に鑄造せられたり。眞正なる  
科學と、崇森なる美術は自ら彼等の開化中に發達する能はざるなり。故に支那に於ける文學的著述  
の特色は現實的なるにあり、彼は人生天眞の寫實を以て著しき風俗小説、及び戯曲に富めり、然れ  
ども雄渾悲壯なる理想的著述に至りては從來嘗て彼等の間に存在せず。詩三百篇、之れを通觀する  
に純粹なる抒情詩として見るべきもの甚だ少なく、多くは訓戒の意を寓したるにあらざるはなし、  
鄭風鷄鳴の如き、唐風綢繆の如き、何れも實利形式の一邊に偏し、決して自由なる人情の發揮とし  
て見るべからず。支那民族にありては、詩は徒に娛樂暢思の爲に作られたるものにあらず、素と  
是れ實際の人生と爲すあらんが爲めなりしなり。故に孔子は曰く

誦詩三百授之以政不達使四方不能專對雖多亦奚以爲

と。源泉は以て下流を知るべし。後世に於ける支那文學は畢竟此の實利主義形式主義の精神を繼承  
せるものにして、一般に之れを論せんか、實に支那四千年の文學は遂に此の舊圈を穎脱せざるもの  
なり、苟も名教に裨益なからんか、其の言や華なり、其の辭や艶なりと雖、狂言綺語と何の選ぶ所  
ぞと思惟せられたり。

此を以て吾人は彼等の間に宗教的觀念の溢潮を認むる能はず。人或は儒學を稱して宗教なりと云ふ

然れども儒學は宗教にあらず。何となればこれ、現世主義功利主義より至る必然の結果なればなり。蓋し現世の不圓滿不如意に慄焉たらず、如何にかして如意圓滿なる吾が理想に描くが如き世界を實現せんと欲するは宗教心の根據なり。然かも吾人の理想的世界は、この現世に於て到底望み得べからざるを見るや、此の如き世界は、現世を超絶せる彼等の未來永劫中に存在すとなし、而して之れに到達せんには、一切現世の繁累を脱却し、一念信仰の力によるの外なしとなす。此の如き究竟の理想界は、「プレト」の神聖なる共和政治國の如き、佛教の涅槃の如き、光教の光明國の如き、猶太教及び基督教の天國の如き、各々差異ありと雖要するに理想的の社會を目的とし、非現世的たるは其の轍を同じくするものと謂ふべし。然り而して儒學は果して如何、彼れは絶對的現世主義にして超越的にあらざるにあらずや。彼れの教ゆる所は、現實世界の正逕にして超越世界の冥想にあらず。然らば則ち其の目的に於て、其の行徑に於て、儒學が宗教にあらずや明かなり。

支那國民の眼を以て所謂死なるものを觀る、唯だ夫れ逝者が一の活動法を他に變じたるに外ならざるのみ。此の如き觀念を有する國民に對して寂滅爲樂を説く、亦た何の功かあらん。既に然り、此を以て他舊邦に於ては數々發見せらるる所の幽玄奧邃なる神譚の如き、殆んど此の國に於てこれを望むべからず。唯だ彼等は外圍形象の變化を觀じて、あらゆる物体に精靈を附加して以て拜物の觀念を表章せしのみ。

吾人は茲に至り、一言支那社會が中道に於て遭遇したる變形的影響を云ふの必要あるを認む。所謂變形的影響とは何ぞや。曰く道教及び佛教是れなり。

老子は道教の祖と稱せらる。彼れの學は儒學の樂天的なるに反して厭世的なり。彼れは道を云へり

然かりと雖も其の道とは吾人の所謂道にあらざるなり。老子は徳を云へり、然りと雖も吾人の所謂徳に非ざるなり。老子の所謂道とは理なり、人々各々其の所得て賦性を完ふし以て幸福なる生活をなし、吾人の所謂道德の要なく、又た其の何たるやを知らざる状態を以て大道を得たりとなす。故に曰く

### 大道廢有仁義慧智出有大偽六親不和有孝慈國家昏亂有忠臣

と。彼れの哲學の特点是實に消極的の價值を認め過去を輕蔑したるにあり。彼は放縱自肆從容自在、孔子の如く先王の遺教なりとの故を以て人を拘束するを好まず、先王の教權を以て唯一の金科玉條と爲し、故らに禮樂刑政の末に拘泥するを譏れり。其の學理として幾許推重すべきの点ありや否やは暫く之れを措き、其の之れを以て實利主義形式主義の支那國民に恰當せしめんと擬す、偶々以て木に金を接するの類のみ。此に至りて人必ず謂はん。若し子の説の如くんば道教が支那歴史の中葉に至りて、大に蔓延浸潤の形跡あるを致せしは抑々如何と。然れども是れ實に道教の性質を熟知せざるに職由する疑問なり。後世の所謂道教なるものは決して老子の根本的思想に依據せるものにあらす、寧ろ其の瓊末の點を鯁釘補綴して以て附會の教理を逞ふせしのみ、人は云ふ、其徒や盡く恬淡無欲能く老子の教に合すと、然りと雖も是れ少數者に於ける觀察のみ。其の所謂道教徒なるものゝ多數を觀よ。彼等に何の時か其の幽邃なる哲學的思索をなしたるの形跡ありや。彼等は唯だ所謂煉金不死の術なる妖言に蠱惑せられ、以て彼等の功利主義を充足せしめんと欲せしのみ、又た他あらんや。

佛教は或は其の影響の度に於ては道教に優るあらんも、猶ほこれ紛雜的影響を及ぼせしに過ぎず。

佛教が支那に入りし時は拜物の氣風は既に深く浸灌し、人民をして充分に宗祖天地の禮拜に粘着せしめたり。此を以て其の教たる僅かに横濶なる文明の大澤に、少許無紋の皺波を起したるに過ぎず。學者及び天子は自ら支那文明の眞正なる立脚点に立ちて佛教の價值を評定せり、唐の武宗の文に曰く

三代に佛あるを聞かず、漢魏に至りて以て支那に傳はり、偶像を輸入せり。今や至る所僧尼あらざるはなく、工人は不幸にも、彼等の爲めに偶像を造るに従事せり。男にして業を營むなく、女にして織るなくんば、國中必之れが爲めに苦むものあらんとは、古人の戒めたる所なり云々。

佛教が此の如く賤められたる豈に怪むに足らんや、何となれば亦た功利主義現世主義より至る必然の結果なればなり。其の偶塗間痴男痴女の信仰を値ひせし所以のものは、既に佛教本來の原理を棄却して、諸般の附加物と著明なる變形を経たるものに外ならず、彼の死滅主義、涅槃主義、厭世主義の如き到底彼等の歡迎を受くるの素なきなり。

然りと雖顧て思ふ、支那國民が能く其の功利主義現世主義に粘着して、彼の超越的厭世的なる佛教を排斥せしは、實に其の朽柱腐梁を以て、なほ能く今日の形勢を維持する所以なり。彼の印度を見ずや。其の地や膏腴豊饒、世界多く其の比を見ず、東は恆河の大江洋々として分流支派ブラシイ千里の野を灌漑し、南はコモリンの一角、印度洋杳冥漫漶の煙波を受け、水陸の形勝、優に以て覇を宇内に唱ふるに足る。然かも嘗て毛利亞朝の下に、華麗なる文化を織出せる此の國民は、今や一蹶して再び起つ能はず。其の由て來る所以を求む、其の素、一にして足らざるべしと雖も、厭世思想

の浸染は實に其の重なる泉源にあらずや、輪回の觀念に支配されたる印度人は、これを免るゝ唯一の方法として、一切の慾望を絶て、梵天の唯一實體を冥想し、以て個體我の本來空なるを悟了せんとせり。彼等ば茫々たる死後の永劫中に、無限無窮なる轉生の運命ありて、常に吾人を待ちつゝありとなし、厭世鬱憂、宗教的自殺を遂ぐるを以て最後の解脱を得るものとなせり。其の觀念、其の思索の哲學上に於ける價値の如何は余の間ふ所にあらず、唯だ夫れ斯る觀念に驅られたる國民が、物質的文明の上に貢獻すべき成績に於て、甚だ索然たるべきは理の當然なり、果然彼等が國土は土崩瓦解して復た救ふなく、石刻の勅諭は千秋の下、廢人志士をして徒らに憑弔の涙を濺がしむるのみ嗚呼悲哉。

此に至りては、支那人は全然印度人と其の行徑を異にせり。彼等は初より現世的功利的の模型中に鑄造せられたり。輪回何物ぞ、解脱何物ぞ、厭世將た何するものぞとは、彼等が母胎に轉々せる頃より、既に業に遺傳せられたる觀念なりき。彼の支那化成論の著者として有名なるコフーン氏云へるあり。曰く、支那人の勤勉なるは其の最も著しき特色にして、自ら勞力を求むるの性を具へたるものなりと。又た曰く、支那人は猶太人の如く常に「金錢」てふことの念頭を去ることなく、彼等に向て如何なるものを示すも、最先に考へ而して最後に考ふる所は、即ち其の價値の如何にあり、是れ實に支那人の先天的商人たることを意味するものなりと。是れ實に彼等が政治上の革移躍起するに關らず、能く其の個人的性質を維持し、遂に印度人の轍を踏むなきに至りたる大原因なりとす。

吾人今や結論するの時に會せり。

吾人は初めに、支那國民の全般を支配せる中心思想の代表として儒學を論じ而して其の遂に淺薄卑近なる實利主義形式主義に陥りしを説き。進みて支那國民が中途遭遇せる、變形的影響として、道教佛敎を擧げて數辨を費せり。

これを要するに支那民族の思想は、極めて淺近なる功利主義の上に立つ苟も實際生活の上に多少の利益を與ふるものにあらざるよりは如何なるものも不急無益として排斥せらるゝの傾向あり。而して此の功利主義は進歩的にあらずして保守的なり、即ち唐虞三代の古帝王の遺業を繼紹し、一切行動凡てこれに法るは、支那四千年歴史に於ける中心思想なり。此の保守的精神は後世に至りて、一個の鞏固なる形式主義となり、其の歴史的情性は殆ど絶對無上の威力を以て、國民の思想行動に莅むに至れり。是れ支那歴史に變遷ありて發達なく、回顧ありて進歩無き主要なる所以なりとす。而して此の老大帝國が世界人文史上に於て、極めて無意義なる位置を占得したる所以なりとす。嗚呼彼等は古來實利主義形式主義の奴隸として、幾千週の春を送り秋を迎へて、現代に其の歴史を回轉し來り、再び無意義に其の回轉を繰り返して、遂に未來の朦朧たる永劫黑幕中に沒し去るべきか。ブルジョア氏言ひ曰く支那は運命の命令を待ち、若くは救授者の出現を待つ所の舵なき橋なき小舟の如く、時間の海に横はれりと。嗚呼伽藍は雨淋風打再び修築するの時期なかるべきか、舵なき橋なき小舟は漂漾泛々遂に沈没すべきか。嗚呼支那は長へに眠りて復た覺むべからざるか。十九世紀末に於ける東亞の歴史！ 皆を決してこれを望めば、眞に雲低く垂れ日空しく沈み、轉た人をして愁殺せしめんとするものあり。嗚呼是れ一部滅亡の慘劇史のみ。アールヤ人種がツラン人種を攪弄したる一個浮誇の紀念碑のみ。呪はんかな此の惡日、汝が日には強者益々其の威を逞ふ

して、弱者は殆んど淪滅の悲運に遭へりき。世界は漸く其の罪惡の歴史を披展し初め、人は白晝假面を被りて虎狼の搏噬を逞うせりき。然れども猶ほ未だ解釋せられざる問題あり。曰く支那問題を如何にすべき。屹然たる九十萬方里の大帝國、今や蘭臺鳥雀空しく啼き、蜀峽秋雨連りに急なり。今の所謂支那經營を以て任ずるの諸士、若し卿等にして一度思ひを彼の國民思想の淵源に沈め、然かして後卿等の妙算奇籌を畫するの人あらば、余不肖なりと雖も乞ふ與り聞かん。

## 文苑

### 楡の森の一夜

雛 羊

When breezes are soft and skies are fair,  
With the bright stars like flower,  
I steal away to the woodland scene,  
Where wanders the stream with waters of green.

Bryant.

靜にして星の匂、花の如きは、眞に札幌の星月夜なり。

楡の森の中に、靜かなる星月夜をながめて、そが與ふる自然の靈化に、接觸せんが爲めに、いとしき姉に見送られて、宿を遣ひ出づ。